

保育における短期指導計画の作成指導の実践と考察

－「カリキュラム研究」の授業を中心に－

柴田 智世

A Study on the Practice for the direction of the short-term teaching plan

－Focusing on “Curriculum Studies”－

Tomoyo Shibata

キーワード：短期指導計画 short-term teaching plan, 実習 practice teaching,
授業評価 student's evaluation of teaching

はじめに

保育者を目指す学生にとって、幼稚園実習および保育所実習に取り組むにあたり、指導計画をどのように立てるかということは、大きな課題であると言える。このことは、実習前と実習後に学生に対して調査した研究（柴田・ト田・岡本,2009）からも明らかになっており、多くの学生が指導計画の作成に何らかの不安を持っていることが分かっている。

本学では、特に2年次での実習において、実習先で指導計画を立てた上で、それに基づいて保育をする研究保育（園によっては、指導実習、研修保育、設定保育など様々な呼び方があるが、本稿では研究保育と示す）が行われる。そうした実習内容に向けて、実習前の学内での授業において指導計画を作成する力を身につけることは、大変重要である。しかし、実習事前指導において、指導計画作成のための授業時間が潤沢にあるとは言えず、限られた時間内での学びとなっているという状況も現実として見られる。そのため、2年次前期開講の「カリキュラム研究」の授業において、実習指導の一部である指導計画作成のための学びを担っていくことが必要となっている。

本研究では、表1で示している「カリキュラ

ム研究」の授業のシラバスの第8回～10回の授業内容である「短期指導計画の作成」に焦点を当てて、学生が実際にどのように指導計画を作成する力をどのように身に付けていったのか、また、どのような指導が有効であり、そうではない点、学生にとっての課題は何であるのかについて検討していくことを目的とする。

1. (1) 昨年度(2010年度)のカリキュラム研究の授業計画・目標

本科目の概要、学習教育目標・到達目標については、次の通りである。

＜科目の概要＞（2010年度シラバスより）

・カリキュラムには、私たちが「子ども」をどのような存在として捉え、どのような保育を目指しているのかという根本的な問いが描き出されるものである。そこで、それらを実現する方法にはどのようなものがあるかを考え、それによって導き出される教育課程、保育課程、指導計画のあり方や、具体的な環境構成のあり方について学ぶ。

＜学習教育目標・到達目標＞

(2010年度シラバスより)

- ・ 教育課程、保育課程、指導計画の意義と目的を理解する。
- ・ 短期の指導計画の作成をする。
- ・ 長期の指導計画の作成をする。

また、シラバスにおける 15 回授業の予定については、表 1 の通りである。

(2) 短期指導計画作成のための学びの過程

短期指導計画を作成するために、学生の学びの過程としては、次の通りである。

学生は本授業において、朝の時間、お昼の時間、おやつ時間のよう、保育の生活の一部分の指導計画を作成する。これは、学生が実習中に毎日書いている実習日誌と同様のものであるため、学生にとっては、生活の部分の指導計画は比較的書きやすいと考えられるためである。

次に、主活動の指導計画を作成する。これは、実習園の先生から、学生がクラスの主活動のための時間を部分的に頂いて、指導計画を立案し、保育を行うというものである。多くの学生が、製作活動や集団ゲーム、運動遊び、表現遊び、絵本読み、紙芝居などを準備して実習に臨むケースがほとんどである。ここで学生が頭を抱える点は、年齢による発達過程を踏まえた保育活動となっているかどうか、自分が考えている活動を、実習園の子どもが喜んで取り組んでくれるかどうか、ということに始まり、指導計画という紙面においての適切な記述の仕方等について悩んでいることが多い。また、学生自身が科目担当者である筆者に個人的に相談を持ちかけてくることも多い。それは、実習前に行われる園での事前訪問指導によって配属クラスが決まった後、「研究保育案で何をすればよいのか。」という内容である。これに関しては、筆者がこれまで勤めてきた他の 2 つの保育者養成校においても明確なデータはないにしても、実際に筆者が学生と接する中で毎年、目の当たりにしてきた学生の実態として顕著であった。つまり、実習という大きな舞台で失敗したくない、そつ

なく研究保育をこなしたい、という不安の表れでもあろうかと思われるが、そうした心理の中で学生は「失敗しない研究保育」を求めるあまり、「研究保育で何をすればよいか」というある種の答えを求める問いが現れるのではなかろうか。しかし、研究保育がどのようなものを示すのかを授業内で説明し、学生は理解をした上で、研究保育案を立てる練習を行っている。また、1 年次後期には学内で「研究保育報告会」が開催され、2 年生の先輩が実際に実習で研究保育をどのように行ったのか、1 年生、2 年生が揃って報告を聞き、指導計画も配布される機会が整えられている。少なくとも、研究保育のイメージや大まかな意味は想像していることと思われるが、自分自身の研究保育の中身を考えることができない、という点に、筆者は大変疑問を感じている。こうした実態を嘆いても学生は変わらないため、研究保育について先のような漠然とした疑問を投げかけてきた学生に対して、「あなたが園の子どもたちと一緒にやってみよう活動は何か。」「あなたができそうな活動は何か。」という発問をすることで、学生には何らかの示唆を与えられるようになった。本来、子どもの生活は日ごとに独立したものではなく、カリキュラム編成上は、教育課程・保育課程→年間指導計画→期別指導計画→月別指導計画→週案→日案の一連の流れで作成されるものであるため、学生が実習生としてクラスに入る前のクラスの様子を遡って、研究保育案を作成することはいうまでもない。しかし、実態としては学生の力でやることのできる研究保育が行われており、受け入れる園側もそれを承諾しているというのが現状である。

尚、授業中に学生が作成した指導計画は、提出後、筆者が全て添削をし、学生に返却をしている。このことにより、学生も自身の足りない点を理解し、次回に作成をする時にはよりよいものを作りたいという動機づけにもなっており、教育的効果が望まれている。

(3) 授業の結果

(ア) 授業評価アンケートによる理解度、満足度

こうした取り組みの結果の評価を明らかにす

るために、学内で期末に学生に対して行われている授業評価アンケートの結果から分析を行う。

(イ) 学生の自由記述（良かった点、改善してほしい点）より

自由記述の結果は、次の通りである。

<p><良かった点> アンケート結果より抜粋</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 実習に向けて自分のためになった。 ・ 大変だったが指導案の勉強になった。 ・ 実習で役に立った。(3名) ・ 大変だったが、指導案など実習に活かすことができた。 ・ ホワイトボードを使って説明してくれて分かりやすかった。 ・ ねらいの立て方(書き方)が分かった。 ・ 指導案の書いてあるプリントをもらったこと。 ・ 手遊びをやってくれて色々と学んだ。 ・ 教科書が分かりやすい。
<p><改善してほしい点> アンケート結果より抜粋</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 授業時間内にプリントが終われるようにしてほしい。・・・【1】 ・ 実習で忙しい時に課題が多くてきつかった。・・・【2】 ・ 書き方など、もっと具体的なアドバイスを教えてほしい。 ・ 授業中に3・4・5歳児それぞれの指導案を書くことができたなら良かった。 ・ 指導案が大変だった。 ・ ただ指導案を写すことが多かったと思う。 ・ 実習に行った時に、「導入・展開・まとめ」で分けるやり方はしなくていいと言われたが、どうすればよいか。・・・【3】

(4)考察

良かった点については、次の通りである。学生には、実習記録や指導案は丁寧な文字で書くようにと指導していたことから、授業内での板書の文字の書き方や、書くスピードやタイミングなどは、日頃から配慮をし、工夫をしていた。そのため、板書が分かりやすい

という評価がついたことは大変有難く思われた。

「教科書が分かりやすい」との記述があったが、使用していた教科書は学生（実習生）のみを対象としているのではなく、現場の保育者も対象とした内容であったため、筆者としては使いにくさを感じていた。そのため、部分的に使用せざるを得なかった。次年度は、教科書の選択を再検討する必要がある。

改善してほしい点についての考察は、次の通りである。

【1】、【2】においては、できるだけ授業時間内で、学生が指導案の作成を行うことができるように心がけていた。しかし、作成にあたり、教材研究を十分に行い、力を身に付けてほしいと考えたことから、時間内では完成することは困難であり、やむを得ず宿題として課すこともあった。このため、不満として、アンケートに記述していると考えられる。しかし、こうした宿題を初めとする課題類の提出については、ほとんどの学生が提出期限を守っていたため、学生の意欲や、取り組みへの前向きな姿勢が感じられた。

【3】の「実習に行ったときに、『導入・展開・まとめ』で分けるやり方はしなくていいと言われたが、どうすればよいか」については、指導案を立てる際に、「導入（これからの活動に子どもたちが期待をもつことができるように動機づけをはかる段階）」→「展開（活動のメインであり、子どもたちが思い切りその活動を行い、充実感や達成感を味わう段階）」→「まとめ（活動の振り返りと、次回への期待をもつ段階）」の3つのステップを考えて立案するようにと、授業内で指導をした。このことは、阿部（2009）にも述べられており、指導案の流れをどのように構成していくかを明確に学生に伝えるためには、有効な方法であると判断し、提示していた。しかし、保育現場では、実際はこうした方法を取らずに指導案を立てることも多い。こうしたことは、前もって起こりうるであろうと予想されていたため、学生には学内で学んだ指導案例はごく一部に過ぎず、様々な園の書式が存在

するため、園の指示に従うようにと指導した。

2. (1)今年度(2011 年度)のカリキュラム研究の授業計画・目標

本科目の概要、学習教育目標・到達目標については、次の通りである。2011 年度と異なっている点は、科目の概要の下線部が追加された点である。昨年度(2010 年度)、実習後に提出された学生の実習日誌を評価したところ、こちらが予想していたよりも日誌の書き方が芳しくなかったことが今後の課題として挙げられた。それは、学生が子どもを観察する方法や子どもを見る視点を習得しきれずにいることが原因であると考えた。

そのため、下線部にあるように観察の方法と記録の仕方や記録の前提となる保育中のメモの取り方についての理解を深め、技術の習得を目指した。なお、学習教育目標・到達目標については特に修正の必要がないと判断したため、昨年度(2010 年度)と変更はしていない。

＜科目の概要＞(2011 年度シラバスより)

・カリキュラムには、私たちが「子ども」をどのような存在として捉え、どのような保育を目指しているのかという根本的な問いが描き出されるものである。そこで、それらを実現する方法にはどのようなものがあるかを考え、それによって導き出される教育課程、保育課程、指導計画のあり方や、具体的な環境構成のあり方について学ぶ。また、指導計画を作成するためには、子どもを観察するところから始まるため、観察の方法と記録の仕方についても理解を深め、技術の習得を目指す。

＜学習教育目標・到達目標＞

(2011 年度シラバスより)

- ・ 教育課程、保育課程、指導計画の意義と目的を理解する。
- ・ 短期の指導計画の作成をする。
- ・ 長期の指導計画の作成をする。

また、シラバスにおける 15 回授業の予定については、表 2 の通りであり、昨年度(2010

年度)のものをベースに、授業評価アンケートの結果や、筆者の反省を活かして、若干の加筆・修正を加えた。

昨年度は、短期指導計画の作成とまとめを合計 3 コマ内(第 8～10 回)で行っていた。この結果、学生からの授業評価アンケートの改善してほしい点にもあるように、乳児(0～2 歳児)と幼児(3～5 歳児)のそれぞれに対応した指導案の書き方を提示できなかった点や十分な授業内容が保証できなかったことが、今年度の課題として挙げられた。そのため、今年度は、登園時・朝の会・昼食・帰りの会など、保育の生活の部分の指導計画を作成する時間を 2 コマ分確保するようにした。

それから、年齢別の主活動の指導計画を作成するために、第 9 回の授業では乳児(0・1・2 歳児)、第 10 回では幼児(3・4・5 歳児)の部分実習案を作成するように工夫したことが、昨年度とは異なっている点である。

(2)授業の結果

(ア) 授業評価アンケートによる理解度、満足度

こうした取り組みの結果の評価を明らかにするために、学内で期末に学生に対して行われている授業評価アンケートの結果から分析を行う。

(イ) 学生の自由記述(良かった点、改善してほしい点)より

自由記述の結果は、次の通りである。

＜良かった点＞ アンケート結果より抜粋

- ・ 実習記録の見本を見ながら練習したり、指導案を真似したり、分かりやすかった。(3 名)・・・【1】
- ・ ホワイトボードに丁寧にまとめたので、分かりやすかった。(7 名)・・・【2】
- ・ 日案や部分実習案の書き方を学んだことで、実習に活かすことができて良かった。(9 名)
- ・ 授業の進行速度がちょうど良かった。(2 名)

＜改善してほしい点＞

アンケート結果より抜粋

- ・ 指導案の書き方が園によって違うことを理解して、いろいろな園の書き方を練習しなかった。・・・【3】
- ・ 教えてもらったやり方でやったら注意されたので、改善してほしい。・・・【4】
- ・ 書くのが多くて疲れる。(2名)
- ・ 書き写す作業が多い。
- ・ もう少し日案を立てる練習を実習前にやりたかった。・・・【5】
- ・ 実習前に指導案の種類を知りたかった。・・・【6】
- ・ グループ授業はやりにくい。・・・【7】

(3)考察

良かった点については、次の通りである。

【1】については、見本となる実習日誌や指導案を提示し、その中の重要な部分やポイントとなる点を説明した上で、模写をするようにした。また、段階を追って見本の中の一部を限定して「あなたなら、この部分をどう記述するのか、自分のアイデアで書いて下さい。」と発問することにより、学生も単に日誌や指導案を移すレベルから、自分の考えのもとに創作できるというオリジナリティを発揮でき、そうしたことが良い評価につながったのではないかと考える。

【2】については、板書の教育的効果を示していると思われる。本学の学生の実態として、授業でホワイトボードに書いたことはノートに写すが、口述内容については、それが必要な情報かどうかを自ら取捨選択して写す能力を持っている学生は、そう多くはない。そのため、板書を丁寧に行うことは大変重要であると考え、内容を吟味して提示するように工夫したことは効果があったと思われる。

次に、改善してほしい点については、次の通りである。

【3】と【4】は、関連性があり、園のスタイルに合わせた書き方を練習することは大切である。しかし、実習前の段階で、各学生の実習園で求められる書き方を把握することは不可能である。

なぜなら、実習が始まって実際に実習日誌や指導案を書くという状況に直面してから、園からの指導を受けることによって初めて学生は園のスタイルを学ぶのである。特に【4】の記述に関して言えば、学内で指導したことが園のやり方に通用するかどうかは、大変言い難い。こうした状況は毎年発生するものであると捉え、「授業では、教科書のやり方を説明するが、園のスタイルは実習が始まってからでしか知ることができないので、そこでの指導に従うように。」と事前に学生の内諾をとっておくことしか出来ないのであろうか。けれども、このことは教える側の都合であり、学生の立場としては、授業での指導に完璧な解答を望んでいるとも言えるため、双方の折り合いをどこに求めるのかは大きな課題である。

【5】については、学生自身がまだまだ授業内容に物足りなさや、実習前の学びの必要性を切に望んでいるという向上心の表れとも考えられる。また、今年度は事前訪問指導を受け、配属クラスが決まった後、自分で授業外の時間に指導案を立てて、筆者のところに持ってきて添削をしてほしいと希望する者が、例年と比べると多かった。こうした個人指導は、学ぶ意欲のある学生にとっては大変効果的であろう。

【6】については、シラバスの第4回「指導計画のいろいろな種類とその内容」において、教育課程・保育課程を始めとする様々な指導計画の種類を説明し、例をいくつか提示し、参考資料を配布していたのだが、学生の身につかなかったということであろう。このことについては、今後の課題である。

【7】については、授業内容そのものとは直接関係がないが、前年度まではこの授業は各クラス(1学年を3つのグループに分ける)での開講としていたが、今年度からグループ授業(1学年を2つのグループに分ける)にしたため、1グループあたりの受講者数が増え、学生がやりにくさを感じていたと思われる。来年度はこのことも検討したい。

(4)学生の指導案の添削から見る課題

次に、実際に学生が授業中や、実習で作成し

た指導案の中から、特徴的なものを取り上げ、検討することとする。

①タイプ A:「ねらい」の記述が不十分である

ねらい: クラスでドッジボールをすることで、機敏性を養う。(A 子の指導案より)

ねらい: カルタ遊びで、友達に負けないでたくさんカルタを取る。(B 子の指導案より)

ねらい: 糸電話の製作で、上手にはさみを使って丁寧に作る。(C 子の指導案より)

学生は、「ねらい」の内実を技術の習得や目標の達成と同義に捉える傾向があり、A タイプのような記述をすることが多い。そのため、授業内で「ねらい」は子どもたちに育てたい心情・意欲・態度であることを説明し、達成目標や到達目標ではないことを述べることにより、このような記述はほとんど見られなくなっていった。

②タイプ B:「実習生の配慮・援助」の記述が不十分で、文章の詳細さに欠ける

実習生の配慮・援助: 給食を食べる援助をする。
(D 子の指導案より、下線部は筆者)

実習生の配慮・援助: 遊んだおもちゃの片づけを促す。
(E 子の指導案より、下線部は筆者)

実習生の配慮・援助: 帰りの支度の援助をする。
(F 子の指導案より、下線部は筆者)

実習生の配慮・援助: トイレの援助をする。
(G 子の指導案より、下線部は筆者)

これらは、学生が子どもたちの関わる時の仕方を、下線部に示すように「援助をする」「促す」という言葉を用いて、簡潔にまとめすぎているタイプである。つまり、給食や帰りの支度、片付けの際に具体的にどのような行動や言葉がけ

によって子どもと関わるのかが明記されていない。この場合、それぞれの保育の場面で、実際にどのような子どもの姿が予想されるのかを挙げ、どう接するのかを学生に口述させ、それを指導案に記述するとしたらどういった文章になるのかを提示していく。

例を挙げると、「給食を食べる援助をする」では、好き嫌いが多くて食べようとしない子、スプーンやおはしがうまく使えない子、おしゃべりに夢中になっていて食事が進まない子等が予想される子どもの姿であろう。それを、指導案上に、「実習生の配慮・援助」として記述していくと、「好き嫌いが多くて食べようとしない子には、人参やピーマンを食べると元気がわいてくることを伝え、励ます。」「苦手な食材は、小さく切り分け食べやすいようにし、子どもが食べることができたら優しく褒める。」「スプーンやおはしがうまく使えない子には、実習生が手を添えて持ち方を教える。子どもが自分の力で食べられる喜びを一緒に共感する。」「おしゃべりに夢中になっていて食事が進まない子には、食材に興味をもてるように話をし、実習生が楽しんで食べている姿がモデルになるようにする。」などである。

「遊んだおもちゃの片づけを促す」では、「子どもたちがまだ遊びを続けたい気持ちを受け止めながら、次の活動に期待が持てるような言葉がけをして片づけを促す。」「片づけを頑張っている子どもには、個人的に褒め、励ましとなるようにする。」などが訂正例である。

このように、予想される子どもの姿を予想して、実習生が子どもと関わる際の具体的な援助や配慮事項を文章として起こしていく作業が必要である。

3. まとめと今後の課題

2010 年度と 2011 年度の取り組みから、どのような指導が短大生の力を伸ばすことになるのかを考えたい。

まず 1 点目は、実習日誌も指導計画もある一定の書き方がベースになっているといえる。それは、多くの実習事前事後指導用の教科書類、テキスト類に見られる実習日誌の記入例や指導

計画の作成例を参考にすれば明らかである。

学生の学びのステップとしては、そうしたサンプルを例にして書き方や言葉遣いを真似していくことから始めることが有効だと思われる。その場合、2010年度の授業評価アンケートの改善してほしい点に挙げられた「ただ指導案を写すことが多かったと思う」という意欲の低下に至ることもありうるため、なぜ指導案を模写することが必要なのか、その意義についての説明を行うことや、模範となる指導案を写していく際に、実習日誌や指導計画で使用される独特な言葉遣いを覚えて自身の力にすることや、普段の学生同士で使われている言葉遣い（若者言葉や絵文字など）が、ここではふさわしくないことを事前に指導する必要があると思われる。

次に、教材を研究・分析する力を身に付けることである。製作活動を例に挙げると顕著であるが、学生は保育で子どもたちと製作をするにあたって、そつなく製作物を完成させることが目標になっている場合が多い。もちろん、それも大切なことではあるが、その活動を通して子どもたちにどのような心情・意欲・態度を育てたいのかを明確にしなければならない。つまり、ねらいをどう設定していくか、というところに行き着くのである。そのためには、教材が単に製作の一材料にとどまるのではなく、教材が環境として子どもにとってどのような意味をもつのかという点まで考えていくことが必要であろう。

3点目は、学生が書いた指導計画を一人ずつ赤ペンを入れて添削していくことは、学生の意欲をあげるためにも必要な指導であると思われる。学生が書いたものは、授業として書かせる以上はそれらを教員側がペンを入れ、返却することが大切である。それにより、次回書くときにはより良い物が出来上がる。また、それだけでは学生は自分の書いた指導案の中での理解レベルにとどまってしまうため、他学生の良く書いている物を配布し、優れている点を小グループで話し合いの時間をもつことも有効であると思われる。

以上より、2010年度と2011年度のわずか2年間にわたる結果の分析であったが、学生にと

ってのより良い授業となるように考察することができた。

最後に、授業での指導と、園の指導にズレを感じ不安を抱くことがあるという点については、実習中の指導を園サイドに全面的に依拠しているという現実が理由の一端であるとも言える。今後は、学生が保育活動や遊び、教材を研究・分析する力をどのように身に付けていくかが課題である。これに関しては、授業内でワークシートを作成し、研究保育に向けてどういった準備が必要であるかを把握するために行っているものの、不十分が多く、明確な成果はあまり見られないため、一層の研究が必要である。

【参考文献】

- (1) 阿部明子他：『<新訂第2版>幼稚園・保育所実習の指導計画はこうして立てよう』萌文書林（2009）
- (2) 石垣恵美子，玉置哲淳，島田ミチコ，植田明 編著：『新版 幼児教育課程論入門』建帛社（2002）
- (3) 厚生労働省：『保育所保育指針解説書』フレーベル館（2008）
- (4) 文部科学省：『幼稚園教育要領解説書』フレーベル館（2008）
- (5) 大橋喜美子 編著：『はじめての保育・教育実習』朱鷺書房（2003）
- (6) 柴田智世，卜田真一郎，岡本和恵（2009）「実習への意識調査から見る実習事前・事後指導の今日的課題」日本保育学会第62回大会 発表論集

表2 2011年度「カリキュラム研究」シラバス(開講年次:2年前期)

回	テーマ	学習内容・理解目標・留意点
1	オリエンテーション 保育(活動)と指導計画の考 え方の基本	授業の目的、授業内容、進め方、受講態度、評価方法などにつ いての説明を聞き理解する。
2	指導計画の意義と必要性	なぜ指導計画を立ててるのか、その意義と必要性について学ぶ。
3	指導計画の立て方の手順と考 え方	「活動提案型」と「遊びの延長・発展型」の指導計画の立て方 と手順について理解をする
4	指導計画のいろいろな種類と その内容	指導計画にはいろいろな種類があり、それらが保育においてど のように位置づけられているのかを学ぶ
5	指導計画の作成(1) 登園時・朝の会	部分実習案(登園時・朝の会)の指導計画を作成する。
6	指導計画の作成(2) 昼食・帰りの会	部分実習案(昼食・帰りの会)の指導計画を作成する。
7	観察・記録の仕方(1)	子どもの観察・記録の方法を学び、そこから明らかになる子ど も同士の関係性を読み取る。
8	観察・記録の仕方(2)	子どもの観察・記録の方法を学び、そこから明らかになる子ど も同士の関係性を読み取る。
9	短期指導計画の作成(3) 0・1・2歳児	部分実習案(0・1・2歳児)の指導計画を作成する。
10	短期指導計画の作成(4) 3・4・5歳児	部分実習案(3・4・5歳児)の指導計画を作成する。
11	長期指導計画の作成(1)	月案の事例分析を行い、指導計画(月案)を作成する。
12	長期指導計画の作成(2)	期案の事例分析を行い、部分的に指導計画(期案)を作成する。
13	長期指導計画のまとめ	長期指導計画と教育課程・保育課程との関連を踏まえて考察を 行なう。
14	指導計画の評価の意義と方法	保育者が指導計画をどのように評価すればよいか、その意義 と方法について学ぶ。
15	まとめと今後の課題	指導計画を自分の保育に生かすためにはどのようなようにしたらよ いのか、また今後の課題について理解を深める。

表1 2010年度「カリキュラム研究」シラバス(開講年次:2年前期)

回	テーマ	学習内容・理解目標・留意点
1	オリエンテーション	授業の目的、内容、進め方、受講態度、評価方法などにつ いての説明を聞き理解する。
2	指導計画の意義と必要性	なぜ指導計画を立ててるのか、その意義と必要性について学 ぶ。
3	幼稚園教育要領・保育所保育指針において、どのように指導 計画を立てることが求められるのかを把握し、その課題 を明らかにする。	
4	指導計画の作成のために 子どもと保育者がともに創り出す指導計画とは何かについて学 ぶ。	指導計画を作成するにあたり、子どもの事実から学び、子ど もと保育者がともに創り出す指導計画とは何かについて学 ぶ。
5	子どもの観察の視点と方法(1)	子どもを観察する意義を押しえた上で、観察の視点と方法に ついて実際の子どもの姿から観察記録をとる。
6	子どもの観察の視点と方法(2)	(1)と同様に、観察の視点と方法について実際の子どもの 姿から観察記録をとる。
7	観察の整理の仕方	観察記録の整理の方法を学び、そこから明らかになる子ども 同士の関係性を読み取る。
8	短期指導計画の作成(1) 日案の事例分析を行い、指導計画(日案)を作成する。	
9	短期指導計画の作成(2) 週案(または週日案)の事例分析を行い、指導計画(週案ま たは週日案)を作成する。	
10	短期指導計画のまとめ	短期指導計画と教育課程・保育課程との関連を踏まえて考察 を行なう。
11	長期指導計画の作成(1) 月案の事例分析を行い、指導計画(月案)を作成する。	
12	長期指導計画の作成(2)	期案の事例分析を行い、部分的に指導計画(期案)を作成す る。
13	長期指導計画のまとめ	長期指導計画と教育課程・保育課程との関連を踏まえて考 察を行なう。
14	指導計画の評価の意義と方法	保育者が指導計画をどのように評価すればよいか、その意 義と方法について学ぶ。
15	まとめと今後の課題	指導計画を自分の保育に生かすためにはどのようなようにしたら よいか、また今後の課題について理解を深める。